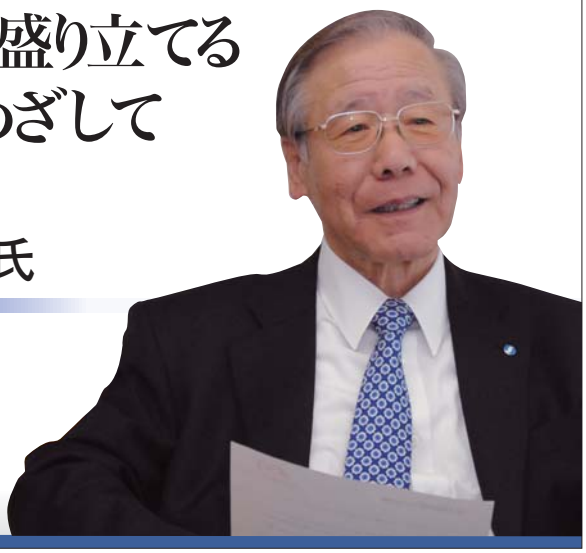
トップは語る

東北支部

地域に根ざし、山形を盛り立てる最高のサポーターをめざして

株式会社山形新聞社
代表取締役社長

寒河江 浩二 氏



山形新聞社は、2016年に創刊140周年を迎える歴史ある新聞社。進取の精神に富み、1979年には全国紙に先駆け、いち早く新聞のカラー化に踏み切った。デジタル化に対する取り組みも早く、1986年には新聞制作をCTS（Computerized Typesetting System）に完全移行している。2012年に就任した寒河江浩二社長のもと、地域に親しんでもらうための紙面作りはもとより、県民と一体となった事業の展開や地域振興のサポートを率先して進めている。あくまで地方紙のオリジナリティにこだわり、県民に必要とされる新聞社へ向けた努力を欠かさない。

さがえ ひろじ／1947年生。山形大学教育学部卒。1971年株式会社山形新聞社入社。東京支社編集部長、論説委員長、編集局長などを経て、2012年同社代表取締役社長に就任。座右の銘は藤沢周平も好きだったという老子の言葉『飄風は朝を終えず驟雨は日を終えず』。つむじ風やにわか雨が長く続くことはないのだから、苦しくても努力を続ければ必ず道は開けるし、努力が報われるような世の中でなければならないと考える。価値観が揺らいでいる現代だからこそジャーナリズムの矜持が大切だと語る。

株式会社山形新聞社
- 所在地：〒990-8550 山形県山形市旅篭町2丁目5-12
- TEL：023-622-5271（代） http://yamagata-np.jp
- 創刊：1876（明治9）年
- 資本金：1億5,000万円
- 年商：77億8,800万円
- 従業員数：222名（2014年3月現在）
- 関連会社・団体：山形放送株式会社、山新観光株式会社、株式会社YCC情報システム、山新建装株式会社、東北映音株式会社、山新オフセット株式会社、富士電子株式会社、株式会社山形アドビューロ、株式会社山新エステート、株式会社山新広告社、山新販売株式会社、株式会社YCCデータサービス、株式会社山新メディアサポート、一般社団法人山形県勢懇話会、公益財団法人山新放送愛の事業団

常に市民目線で考えることが地方新聞の役割

地方紙の役割はいかに地域に密着し地域のニーズを把握し信頼感を得るか、ということに尽きます。この新聞でなければ読むことができない情報を読者に提供することで全国紙との明確な差別化をはかります。これをなくして地方新聞は成り立ちません。

山形新聞社では、山形の特性を熟知した上で、主な読者である山形県民にとって何がいま有益な情報なのかを徹底的に考えます。大切なのは市民目線でものごとを見る姿勢です。高齢者がいま悩んでいることはどんなことか、子育て世代はどんなことを望んでいるのか、子どもたちの成長、豊かな環境を守るためには何を行うべきなのかなど、市民目線で眺めれば様々な課題が浮かび上がります。

例えば、本年2015（平成27）年1、2月には「県内　進む高齢化　間口除雪を考える」という連載を掲載しました。これは除雪車が通ったあと、道路から押しのけられた雪が各戸の間口に溜まってしまい、この除雪に大変苦労している実情を取り上げ、問題提起を行ったものです。特に高齢者や障害者、女性だけの世帯では、固まって重くなった雪を取り除くのは容易ではなく、行政の支援や設備の拡充などの必要性にも触れました。この連載は、一般社団法人日本新聞協会の協会報でも紹介されるなど話題になりました。

また、山形ではブランド米に代表される質の高い農業が根付いている一方で、製造業、ものづくりが非常に盛んです。これらの振興をサポートする意味で新聞社として率先して現状を伝える必要があると考え、本年は「やまがた農新時代」「その先へ 山形ものづくり立県」と題した山形新聞の二大年間企画を展開し、新技術や新たな発想で道を切り拓いている事例を紹介しています。

このように、いま市民生活の足元にある課題を細やかに取り上げ、それを活字化していくことで社会への認知度をはかることが地方新聞の大きな役割のひとつなのです。

ハードな日常の中でも気持ちを前に向けていく

私が新聞社に入社したのは少年時代に見たテレビドラマがきっかけです。「事件記者」（NHK制作、1958-1966年放送）という警視庁詰めの新聞記者たちの激しい取材合戦を描いたドラマで、毎週夢中になって見ていました。

実際に事件記者として20年近く様々な事件の取材に携わりましたが、現場で学んだジャーナリズムは、今日の私の大きなバックボーンになっています。重要なのは中立な立場を見失わずに、事実に基づいた記事をわかりやすく発信すること。そのためには取材する力、ものごとを見る力、そして書く力を十分に身につけることが必要であり、数々の現場がその力を培ってくれたのです。

1976（昭和51）年、西村山郡朝日町古槇で起きたトンネル工事中のガス爆発事故は死者9人を数える大惨事でしたが、このときの取材は車で寝泊まりしながら現場に1週間ほど詰めるという肉体的にも精神的にもハードなものでした。その結果、とうとう胃潰瘍になってしまったのです。日頃からライバル社にスクープされるのではないかと常にやきもきしながら取材することが多かったので、それがストレスとして鬱積していたのかもしれません。

胃潰瘍になったのを契機に、これではいけないと思い直し、発想を転換しました。抜かれたら、次は2倍に抜き返せばいい、とポ

ジティブに捉えるようにしたのです。後ろ向きにならずに地道に努力を続けていれば必ず報われる、そう考えることにしました。それからは気が楽になり、徐々に成果もついてくるようになりました。足で稼いで人とのつながりの中で取材をさせていただくという姿勢を変えずに日々の仕事を積み重ねていったことが功を奏したのだと思います。辛い時もありますが、努力したら努力した分だけ手応えがあるのがこの仕事の醍醐味です。

事業を通して山形そして東北の地域貢献を行う

山形新聞社では、山形放送と共同で毎年特徴ある事業を推進しています。本年も8大事業として、「グラウンドゴルフ県大会」や体験型イベント「子育て応援団」といった県民に身近なものから、県と鶴岡市がミラノ国際博覧会へ出展するのに合わせた「ミラノ万博視察団派遣」、県民参加型の「太鼓の祭典」や「ダンスフェスタ」など多彩な事業を計画しています。

その中で「最上川さくら回廊」は1996（平成8）年に始まり、本年には20年目を迎える事業です。これは日本三大急流のひとつであり、山形のシンボルでもある最上川の川沿いに桜を植樹し、将来的には人工衛星からも見えるような「桜の回廊」にしようという壮大な計画のもとにスタートしました。県民参加で取り組んできた植栽活動で、毎年100 ～ 600本の植樹を行っており、植樹総数は5,000本近くになりました。本年は山形県内だけでなく、東日本大震災の被災地での植樹も計画しており、桜の植樹がひとつのムーブメントとして東北の復興を応援するものになればと考えています。

さらに最上川を冠した事業には「最上川200キロを歩く～小学校探検リレー」があります。こちらも本年に13年目を迎える継続事業で、5月から7月にかけての毎週土曜日に県内の子どもたちが最上川流域を歩き、源流から河口までフラッグをリレーしていくというものです。自然の恵みや環境保全、健康を考えるきっかけにしてほしいと願っています。

2011（平成23）年の東日本大震災では山形はさほど大きな被害はなかったため、被災地への物資供給や物資輸送の拠点として機能しました。しかし、振り返ってみると山形県内の道路や鉄道、空路のインフラがもっと整備されていれば、さらに迅速になおかつ強力に被災地の支援ができたのではないかと悔やまれます。私たち地方紙が、地元にいるからこそ実感できるこうした日常生活の課題を中央に届けていくのも重要な仕事だと考えています。

山形の発展をサポートし続ける新聞でありたい

山形の産業振興を紙面にて紹介し応援する一方で、有識者を巻き込んだ会合を主催し、現実的にどう取り組むべきかを議論しあう場を設けています。それが「21世紀山形県民会議」で40回目を数えた本年度のテーマは「さらなる高みへ 山形のものづくり」でした。県知事をはじめとして、県関係の国会議員、さらに商工会議所や大学・研究機関、主要産業の代表者を迎え、忌憚のない意見を交わしていただきました。

ひとくちにものづくりといっても、最先端の技術開発から伝統工芸の伝承までその振り幅は非常に大きいですが、科学技術の分野では、県内でいくつか世界レベルの技術開発が進んでおり、様々な産業への応用に注目が集まっています。

そのひとつが「QMONOS（クモノス）」と名付けられたバイオ繊維です。鉄鋼や骨を上回る強度とナイロンを凌ぐ伸縮性を合わせ持つ人工クモ糸で、鶴岡市のバイオベンチャー企業「Spiber（スパイバー）」が量産化に成功し、様々な応用が検討されています。鶴岡市には慶應義塾大学先端生命科学研究所があり、Spiberもここから誕生しました。先端生命科学研究所はメタボローム解析と呼ばれる生物の代謝物質の解析で注目されており、これは製薬・医療・食品・化学など様々な分野での研究開発に役立てることができます。同様に米沢市にある山形大学工学部では有機ELの研究が進み、次世代のディスプレイや照明技術への応用が進んでいます。これらの先端技術はいずれも企業化されており、新産業を生み出す拠点として大きな期待が寄せられているのです。

山形に限らず、行政と産業界が融合し、オリジナリティを持った技術開発や産業を振興できれば、地方都市は非常にユニークな未来を形作ることができると考えています。当新聞社はそうした地域振興を常に強力にサポートできる存在でありたいと思っています。

FUJITSU ファミリ会山形地区例会 文化講演会 記念講演 開催

2015年2月20日、山形グランドホテルにてFUJITSUファミリ会 東北支部主催の文化講演会が開催されました。寒河江浩二社長には『藤沢周平の作品にみる日本人』と題し、ご講演いただきました。長きにわたり藤沢作品を愛し読み込んできた寒河江社長ならではの視点で、作品の魅力はもちろん、独自に研究された藤沢の経歴や人生観など、藤沢の人となりが見えてくるような興味深いお話を展開されました。藤沢は江戸時代を舞台に、下級武士や浪人など決して恵まれた環境にはない人々が、その逆境の中でも生き生きと暮らし、黙々と努力する姿を描いており、そこにはかつての日本人が持ちえた"耐える美学"が存在しているというのが寒河江社長のご見解です。藤沢作品の世界にひきかえ、豊かで平等な現代社会ですが、果たして精神の豊かさはどれほど持ち合わせているだろうか、そんなことを考えさせられたご講演でした。

トップは語る こぼれ話はウェブサイトへ
eふぁみり もあわせてご覧ください!
http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/
eふぁみり
好きなことにはとことん情熱を傾ける寒河江社長の横顔をご紹介します。